雨　～コナン哀ものがたり・番外編～

サブラピッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨　～コナン哀ものがたり・番外編～

【Ｎコード】
Ｎ６８２２Ｃ

【作者名】
サブラピッド

【あらすじ】
雨の夕刻。哀は、捨てられた３匹子猫を拾うが、猫達は、病気だった。ずぶ濡れになりながら、猫を保護し、看病する哀だったが・・・

（前書き）

コ哀です。阿笠博士が少し出る他は、コナンと哀しか出てきません。

雨の夕方。

１１月も半ばを過ぎたこの時期、日の暮れは早い。学会で四国へ行く、一応、保護者の阿笠博士を空港まで見送りに行った灰原哀は、日暮れの雨の中、最寄りの米花駅に着いた。

（かなりの雨ね）

傘を持ってはいるが、この激しい降りでは、濡れるのを覚悟しなければいけない。

阿笠は、小学４年生の哀を心配し、見送りはいい、と言ったのだが、日曜日でもあるし、たまには、阿笠に親孝行のようなこともしてみたいと思い、哀は、空港まで行って、阿笠が乗った飛行機が飛び立つところまで、見送っていた。

実際、阿笠は、大そうな喜びぶりだったが、空港から、ある人物への電話連絡も忘れなかった。

「新一君か？わしゃな、学会でこれから四国へ行くんじゃ。今、空港でな、哀君が見送ってくれとるんじゃが……わしが帰るのは、４日後じゃから、それまで、哀君、一人になるから、頼むぞ」

哀と同じように大人の心を持つ小学生、今は、江戸川コナンと名乗る探偵に、阿笠は、哀のことを頼み、笑顔で旅立って行った。

実年齢では、すでに２０歳ぐらいになるコナンと哀。しかし、体は小学生そのもので、事実、帝丹小学校に通う４年生だった。

一応、コナンと哀は、恋人同士ではある。
しかし、彼らの事情……毒薬によって、体が幼児化してしまったという事実・・・を知る者以外は、マセた小学生だとしか思っていない。

しばらく雨の様子を覗っていた哀だが、小降りになる気配すらないので、激しい雨の中、傘を差して歩き出した。

歩き出して数分もしないうちに、足元はびしょびしょになり、靴の中にも容赦なく雨水が入ってくる。あっという間に腰から下も濡れてきた。傘は、頭や胸あたりを守ってはくれているが、激しい雨に、その下は、濡れるに任せる状態。

11月ともあって、気温も低く、より一層、雨の冷たさが応える。風邪を引きやすい自分のことを心配し、哀は、早足で歩いていた。

ニャー

傘を叩く雨の音が激しく、他の音がほとんど聞こえない中、哀の耳にかすかに鳴き声が聞こえ、足をとめた。

ニャー

あたりを見回す。

ニャー

今、通ってきた住宅街の狭い道が交わる交差点。その向こう側の角に、ダンボール箱が目に入った。声は、そこからするようだ。

（建物の陰で、見落としたのね）

戻ってみると、子供が一抱えできるほどのダンボール箱だった。中を覗くと、小さな子猫が３匹。激しい雨に打たれ、震えている。

（捨て猫……酷いことするわね）

とりあえず、猫たちに傘を差しかけたが、哀は、そこで困ってしまった。

子猫が入ったダンボール箱は、両手でなければ持てない。しかし、今は、激しい雨の中。傘を差していては、ダンボールは持てないし、子猫３匹を抱えることも無理だろう。

でも、哀には、この猫たちをこのままにできるわけがない。

（しかたない）

哀は、覚悟を決めた。傘を閉じ、その場に置くと、ダンボール箱を抱え、歩き出す。なるべく、子猫たちに雨が掛からないように、上からダンボールを抱えるようにして、上体をかがめで歩いた。

小さな体では、水を吸って重くなったダンボール箱を抱えるのは、堪えるものだった。しかも、濡れて脆くなったダンボール箱の中には、子猫が３匹いる。さらに、尿などの臭いが鼻につき、汚れが胸や腕についた。

おまけに冷たい雨。

（最悪。これ以上は、ないわね）

雨の冷たさで、こわばった顔を、哀は、少し歪めて自嘲した。

周りに人がいなくはないが、暗くなっているし、大雨の中、傘を差しているから、ずぶ濡れでダンボールを抱えて歩く少女に気づく人は少ない。気づいた人も、自ら濡れてまで、少女を庇おうという人はいなかった。

１０分ほどの距離だったと思うが、随分遠く感じた。

やっと、阿笠邸の門にたどり着いた哀は、門を開けるのももどかしく、玄関の庇に飛び込み、ダンボールを足元に置いた。

＊＊＊＊＊

リビングで哀は、タオルを数枚用意し、子猫をその上に寝かせると、子猫たちの様子がただ事ではないことに気づいた。

（猫インフルエンザ……）

目ヤニと鼻水がひどく、膿も出ていて、弱り方が激しい。１匹は、時々鳴き声を上げていて、比較的元気だが、他の２匹は、ぐったりしている。

とりあえず、タオルで目や鼻を拭いてやるしかない。哀は、お湯を沸かし、暖房を入れ、３匹の子猫の顔をタオルで拭き続けた。

（この雨とこの時間じゃ、獣医さんのところへ連れていくのは無理だわね。それと、ミルクをなんとかしないと）

哀は、とりあえず、コナンへ連絡しようと立ち上がった。その時、玄関のチャイムが鳴る。

（いつも、困ったときに現れるわね）
哀は、こわばった顔を少しほころばせた。

一応、玄関のチャイムを鳴らし、合鍵で入ってくるのが、コナンのいつもの阿笠邸の訪ね方だった。

「哀。玄関のダンボールは、何……！？」
そこまで言って、コナンは絶句した。

服が汚れ、頭からずぶ濡れになった哀と目が合う。テーブルには、重ねたタオルの上に子猫が３匹。細い鳴き声がしている。それに、猫の尿などの臭い。

「どうしたんだ、おめえ、ずぶ濡れじゃねえか。それに、その猫」
「捨てられてたの。それに、病気で、意識もない子もいるし・・・でも、猫用のミルクもなくて……」

「おめえ……とりあえず、風呂入って、着替えて来い。猫のことは、俺が見ててやるから……」
「でも……早く、ミルクでも飲ませないと……顔も拭いてやらないと、膿でつらそうだし……」

哀は、子猫から離れるのが不安のようだった。

「いいから。猫は俺に任せろ。おめえが風邪ひいちまう、早く風呂入ってこい！」
「……うん。じゃ、お願い」
「ああ」

哀は、風呂へ走って行った。
コナンは、とりあえず、子猫たちの汚れを拭いてやると、哀が沸かしていたお湯を持ってきて、冷ましてから、飲ませてみた。
鳴いていた1匹は、少し飲んだが、他の2匹は、意識がなく、動かない。しかし、まだ生きていた。

哀が戻ってきた。シャワーを急いで浴び、着替えて飛んできたようだ。

「俺がミルクを買ってくるから、おめえ、この子ら、暖めてやっていてくれ。それと、できれば、動物病院を探して、連絡だ」
「ええ」

コナンは、大雨の中、スーパーへ行くべく、飛び出して行った。

＊＊＊＊＊

コナンがミルクを買って帰ってくると、ソファに哀が俯いて座っている。着替えたばかりの服は、袖や胸のあたりが汚れている。
テーブルの上には、汚れたタオルやティッシュペーパー。そして、タオルの上には、小さな猫が3匹。

「だめだったの……あなたが出て行ってから、すぐ……2匹が息しなくなって……一所懸命人口呼吸してやったけど……そしたら、もう1匹も……気づいたら、鳴かなくなってて……」

コナンも、スーパーの袋をその場に落とし、子猫たちの傍に行った。ぐったりした3匹の子猫は、すでに息がなかった。

ソファに座る哀は、手で顔を覆い、俯いて肩を震わせている。

「私……何もできなかった……まだ小さい……この子たちに、何もしてやれなかった……」
「哀……」

コナンは、ソファに座る哀の肩を抱き、隣に座った。
哀がコナンの胸に顔をうずめてくる。

「哀……」
「あんな雨の中、冷たかったでしょうね……心細かったでしょうね……」

そうだ、哀が組織から逃げ出し、工藤新一を頼りにこの町に来て、その家の前で倒れていた日も、今日のようにひどく雨が降っていた。
哀は、阿笠に保護され、今、こうして生きている。

あの日のこと、哀は、何も言わないが、心細かっただろうし、体に当たる雨は、冷たく、痛かったに違いない。

哀を抱くコナンの腕に、いっそう力が入る。
肩を震わせている哀をコナンは、すっと、黙って優しく抱きしめていた。

＊＊＊＊＊

翌日、雨は上り、日差しが眩しい。コナンと哀は、タクシーを手配し、動物霊園に3匹の子猫を運んで弔ってやった。

帰りの車の中、コナンは、哀の様子がおかしいことに気づいた。

「ありがと、工藤君」
「うん」
「あの子たち……少しでも、遊んであげたかったわ……」
「アイツら、少なくとも、おめえに看取られて、寂しくなかったと思うぜ。だから、おめえに感謝してるぜ、きっと」

コナンは、そう言いながら、哀の顔を見つめている。
俯いている哀は、少し、息が荒く、顔色も悪いようだ。

阿笠邸に着き、リビングまで入ると、コナンは、哀を抱き寄せ、自分の額を哀の額にくっつけた。

「おめえ、熱あるじゃねえか！」
「大丈夫よ」
「大丈夫じゃねえよ。ほら、早く着替えて寝ろよ」
「……わかったわ」

哀も、自分の体の変調には、当然、気づいていた。朝から、寒気もする。でも、コナンに心配をかけたくなかったし、猫達を早く葬ってやりたいこともあって、ずっと我慢していた。

少しふらつく体で、2階の自分の部屋へ上がり、着替えるとベッドに横になった。
しばらくして、コナンがドアをノックして声をかけてくる。

「哀。入っていいか？」
「ええ」

コナンがお盆にカップを載せて入ってくる。
「レモンティ、入れてきた。飲むか？」

「ええ。ありがとう、頂くわ」

コナンが哀の上体をゆっくり起し、手にカップを持たせる。哀が一口飲むと、体がじわりと、暖かくなるような気がした。

哀がカップを持っている間、コナンは、後から哀を支え、カップを持つ哀の手に自分の手を添えてやっていた。

熱のせいで、いつもより、熱く感じる哀の体。顔をくすぐる茶色の髪に、キスをしてから、レモンティを飲み終えた哀から体を離した。

「今日は、ずっとこの家にいるから……なんか作ってやるから……じゃ、ゆっくり寝てろ」

空になったカップをお盆に載せ、哀を寝かせて、毛布と布団をかけ、部屋を出て行こうとするコナンを哀が呼び止めた。

「待って」

「え？」

「……ね……もう少し、傍に居てくれない？」

コナンは、フッと微笑んだ。

「……ああ」

コナンがそう言って、哀の傍に座ると、哀がコナンの前に左手を出してきた。

その手をそっと、握ってやる。

「おめえにしちゃ、珍しいな」

「……い、いいじゃない……たまには」

哀の赤い顔は、熱のせいだけだろうか。
「ああ。でも、たまじゃなく、毎日でもいいぜ、俺は」
「……バカ」

コナンは、握った哀の手にキスすると、顔に掛かった哀の髪を優しくかき上げ、今度は額にキスをした。熱のせいもあるのだろうが、哀の潤んだ瞳に、コナンの動悸は高くなる。
哀は、落ち着いた表情で目を閉じた。体は、だるいが、気分は悪くない。

コナンは、その様子を愛おしげに見ている。
左手にコナンのぬくもりを感じながら、哀は、眠りに落ちていった。

（後書き）

哀が組織から逃げ出し、工藤邸の前で阿笠に保護されたのは、雨の降る夜でしたよね。大人用の白衣を着て、傘も差さずに走ってきた哀のことを考えていたら、この話しを思いつき、一気に書きました。はっきり言って、駄文だと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6822c/

雨　～コナン哀ものがたり・番外編～

2010年10月10日16時10分発行